No.14

天覧山・多峯主山の自然を守る会 会報

1997・11・1

やませみ

空色、群青、あかね色…
山ぶどうも空も秋の彩で
いっぱいです。さて
今号では市長・県知事への公開
質問状の回答、そして天覧入りと入間川の
水質調査の結果報告から始まります。
又、たくさんのトンボへの想いを寄稿して
いただきました。
山では冬の鳥がやって来たようです。
木の草も実をつけ次世代への準備が
はじまっている様子。
そんな山規にでかけませんか?
ふる里散歩のおしらせも、今号は新年元旦の
分まで掲載しています。来年のカレンダーへ
チェックをどうぞ。
では、さわやかな風の中で
お読みください。

守る会に寄せられたオオタカについての質問や意見についてお答えします。

◇オオタカは大きい鳥なのですか

多くの方はオオタカをワシのような大きい鷹だと思われているようですが、オオタカを漢字に書くと「大鷹」ではなくて「蒼鷹（あおたか）」になります。実際にはカラスよりも小さいくらいの鷹です。体の背面が青みを帯びた灰色である事に由来します。

◇よく山歩きをしますが、一度もオオタカを見たことがない。本当に居るのですか。

オオタカは森林性の猛禽で人目に触れることが少ないうえ、上空を高く飛ぶことが多く、肉眼では小さな点のような状態で見えます。オオタカの姿を見たい方は、自然を守る会が毎月主催する山歩きに参加されることをお勧めします。当日の天候などにもよりますが、猛禽類の調査に係わる専門家が山歩きには同行しますので、2～3回の参加があればオオタカの姿も見られることと思います。空気が澄んだこれからの季節は雑木の葉も落ち視界も開け、オオタカやノスリを見るにはいい季節です。

FROM EDITORS 編集室から

十九年前、西武の開発計画は撤回され、多峯主山周辺の自然は残し、学校、道路は北側へ造ることで決着した。その運動の中心に、小山市長さんがおられた。精力的に動かれ、勝ち得た自然、残された自然。その時、多くの人達と喜んだ感動は、市長さんの心に残っているはずだ。

奇しくも、その市長さんによって、開発が許可されようとしている。何かに押され考えが変わったとしても、真に飯能のことを考えておられるなら、開発されることにでもなれば必ず後悔される日が来ると思う。

飯能の未来を思う時、町と自然との共生を考えても、あの場所は残さなくてはならない。オオタカ、ハチクマが住み、ホタルが舞い、五十種類近いトンボが飛び交い、多くの植物が自生する生態系がそこにある。なにより山道がいい。歴史を感じる、踏み固められた広い道、細い道。落ち葉の続く、やわらかくやさしい道。一年中、朝早くから夕方まで、絶えることなく多くの人が登る山。こんな場所が、市街地のすぐそばにあるのだ。そして多峯主山の近く、開発されている高麗東急団地、飯能日高団地。ここに住んでおられる人達、これから住む人達にとってもすばらしい自然、心安まる場所になるだろう。今ならこの山の生態系は維持され、あるべき町の姿として未来へ託していけるのです。今、残されているおかげで四季を通じて山に入り、子ども達と喜びの体験をさせてもらっているのです。

（紙田）

会員募集中!!

天覧山・多峯主山周辺の自然を守りたいという目的に賛同して下さる方、どうか会員になって活動を支えて下さい。

会員の申込み用紙、会報「やませみ」市長への手紙の用紙などは、事務局や左記に置いてあります。

☆谷口眼科　☆銀河堂　☆カフェ・裏

やませみ

発行日／1997年11月1日　編集・発行／天覧山・多峯主山の自然を守る会
事務局／浅野正敏　埼玉県飯能市柳町18-17 ☎0429-74-1691 小船明子 ☎0429-72-4602
編集局／早瀬あかね ☎0429-77-1890（FAX兼）　イラスト・レイアウト　石岡 真由海

飯能市長及び埼玉県知事へ公開質問状を提出しました。そして回答は……

今年確認されたオオタカとハチクマの営巣位置が、飯能市で計画している道路と学校予定地に極めて近い事から、守る会では、以下の四項目について、8月19日付けで飯能市長に対し公開質問状を提出致しました。

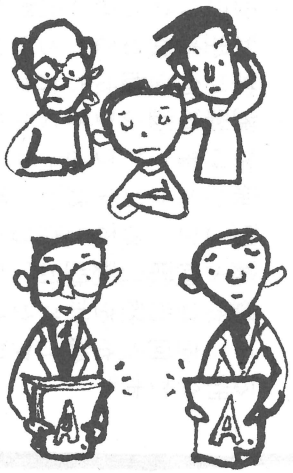
①環境庁の指針に則った対応を進めるか否か。

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づく義務の認識について。

③公正中立な観点からの調査として、市自らが実施するつもりがあるか否か。

④関係者会議の継続的な開催を市としても、積極的に働きかけて頂けるか。

これに対して、9月5日付けで回答が届きましたが、たった三行の文章であったので、児玉助役に面会し、項目別に直接、左記の通り確認をさせて頂きました。



◇①・②については、西武鉄道の調査結果を踏まえた上で市の方針を決めてゆきたい。

◇③について 市自ら実施するつもりはなく 開発企業である西武鉄道の実施している調査を踏まえるとする。

◇④については、時期尚早と考えている。

との事で、最終的な調査結果が出た時点で判断したいとのお話しでした。

今回の市の回答に対して守る会では、質問の大前提として、市が事業手である道路と学校予定地周辺について問うているのであるから、もっと主体的な対応が必要であるとコメントしました。

◆

これに引続き、埼玉県知事に対しても、現在中断している関係者会議再開を強く求める公開質問状を10月2日付で提出致しました。

提出した当日、県自然保護課担当者への内容説明の際、それぞれの項目に対して下記の様な前向きな回答が話されました。

①話し合いの継続の必要性について

当然必要と考えている。

②行政対応の一貫性について

前年度と変わる事はない。

③関係者会議の再開について

今年中に1回行う。

④西武鉄道が話し合いを拒否し続けていることについて

県も再三話し合いの要請をしているが、ただ一方的に拒否しているのではなく、必要な時期を検討しているとの西武鉄道の立場を説明されました。

その他、今年オオタカの繁殖が失敗したのはカラスによる妨害であった事、環境庁のガイドラインにより来年度も引き続き巣立ちまでのデータをとる必要がある旨を西武鉄道に対して指導している事も伺いました。

県自然保護課は、10月13日付けで別添文書で回答をすると共に、11月中頃に関係者会議を開くとしました。

今回の公開質問により関係者会議が再開出来る事は大きな成果であり、今後、県が立ち合う会議の中で保全の方法を探ってゆきたいと考えています。

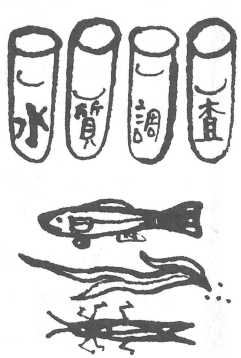
埼玉県生活部自然保護課長の、「天覧山・多峯主山付近のオオタカ保護に関する関係者会議開催についての公開質問状」に対する回答

「オオタカをはじめとした猛禽類の保護につきましては、その重要性を十分認識しているところでございます。

このため、オオタカ保護に関する関係者会議を開催いたしまして、この中でオオタカの調査内容等を中心に意見交換をして参ったところでございます。

今後も、当事者を中心としたこのような話し合いは必要であるとかんがえておりますので、引き続き、オオタカの保護に関して、話し合いが図られるよう西武鉄道株式会社等に対しまして働きかけて参ります。」

水質調査しました。



去る6月8日のふる里散歩に、荒川流域ネットワークによる一斉水質調査に合わせ、入間川とその支流である天覧入りの小川を調査しました。

☆ 試薬による水質調査の結果《表1》のうち、COD（化学的酸素要求量）が生活排水が入らない天覧入りの小川で5ppmを示したのは、枯れ葉などが多く川底に堆積しているのと水量が少ないためと考えられます。本来、きれいな河川は1～2 ppmとされています。

又、入間川本流(名栗川)では、調査地点の飯能河原割岩橋附近はバーベキューや川遊びを楽しむ人達で埋めつくされているという特別な状況下のため5～20ppmという数値が示されました。

☆ PH(水素イオン濃度)は酸性・アルカリ性を示すものですが、天覧入りの小川は7で中性でした。入間川本流の8～8.5のアルカリ性は上流に石灰石があり、これが溶け込んだ水質として特色を示しています。NH^4－N(アンモニア態窒素)とNO^2－N(亜硝酸態窒素)は、溶存酸素の少ない水に多く、入間川本流においてNH^4－Nがかろうじて汚れた河川の数値、0.5～5を下回っていました。

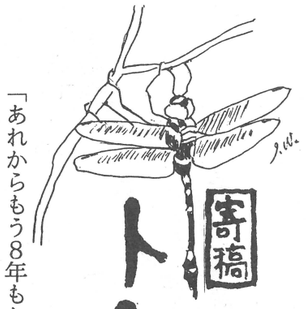
☆ 水棲生物調査では、《表2》の通り、天覧入りではきれいな河川に棲む生物が観察されましたが、入間川本流において汚れたところに棲むミズムシが見つかったのは気になるところです。

表1（試薬による調査）

	天覧入りの小川	入間川本流(名栗川)
COD	5 ppm	5～20ppm
PH	7	8～8.5
NH_4-N	0	0.3～0.4
NO_2-N	0	0～0.02

表2（水棲生物調査）

	天覧入りの小川	入間川本流(名栗川)
きれいな水	トウキョウサンショウウオ ホトケドジョウ　アカムシ サワガニ　カワニナ　イモリ 幼虫（オニヤンマ　ヘビトンボ ヤマサナエ　ミルンヤンマ オジロサナエ　カクトンボ フタスジカゲロウ）	カワエビ 幼虫（ヒラタカゲロウ コシボソヤンマ トビケラ）
汚い水		ミズムシ



寄稿

天覧山裏のトンボについて想う

日本トンボ学会会員　若菜一郎

「あれからもう8年もたつのだ」先日、天覧山の麓をめぐる多峯主山への登山道に立って想いました。当時、まわりの草原も湿地に近く、トンボの種類も数も沢山見られました。昨年、今年と天候も悪かったのですが、ここ1、2年すっかり乾燥が進み、トンボも数が減ってしまいました。私が「シブチャン」と云う雑誌の第一号に当地のトンボをまとめて報告したのが4年前で43種（私の知る限りの文献にも当たり、厳密に地域を決めた調査の結果）もいて、その後3種追加されましたので、現在46種が記録されています。このようにこの一帯は埼玉県で記録されたトンボの半分以上が身近に観察できると云う場所であり、この事実は素晴らしく、なおかつ池袋駅から約1時間で来られるという、現在では奇跡に近い場所だと考えています。

この地を私がなぜこうも大切にするのか、いくつかの事例をあげて説明します。①多峯主山にある雨乞池は昼間ヤブヤンマが飛ぶのがゆっくり見られる関東唯一の場所ではないかと私は思います。あのブルーの眼を光らせて飛ぶ姿はやたらに見られるものではありません。彼等は朝夕は下の草原で餌を食べます。②生きている化石と云われるムカシヤンマがいることです。白っぽい物が好きなのか、静かにしていると飛んで来て、私たちの体にとまることがあります。このムカシヤンマは、狭山湖からこの地を経て北部地域にいるグループの中核ではないかと私は思っています。③登山道がトンボや虫たちの生息域の中を通っていますので、そっと佇んでいると、目の前で色々なトンボの生態を観察できることです。これはトンボに限らず、他の土地では観察の難しい虫や小動物についても同じです。④私は専門家ではありませんが、非常に古い地層上にしか分布していない植物にも気づいています。植物の専門の方に聞けば随分珍しいものを道の脇で見ることができるではないでしょうか。もう百日以上もこの地を訪れていますが、いつ来ても何らかの自然の息吹に触れることが出来て、心が洗われるように感じるのも、自然の豊かさが目の前にあるためと思っています。

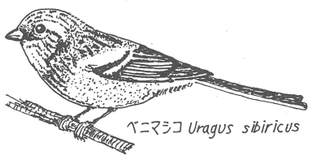
もう一つ特徴的なことは、ムカシヤンマの生息域と同様に、この地域が狭山湖から飯能とその北部の低山域の中核を成していると思えることです。もしこの地域が市街化してしまえば、その中核が抜け落ちて、トンボのみならず他の生き物も分断され、生息環境が狭くなり、繁殖力も年々減少して絶滅に向かう種が急増してくると思います。ことに珍しい種類ほど生息条件がきびしく、繁殖力も弱く、豊かな自然に支えられなければ生きて行けないのです。

話は変わりますが、天覧山裏は小学校の良好な遠足コースで、私もよく子供達に出会います。或る日、雨乞池でトンボの名前などを教えてあげながら、もっとよく見られるようにと一頭のヤンマの雄を、一人の男の子に手渡そうとしたところ、「コワイ」と云って手もださず顔をそむけ、こわごわとトンボを見るような態度を示しました。その時他の男の子も手を出さず、むしろ女の子の方が積極的でした。私はビックリもしましたが、どんな生活をしているのかと考え込まされました。そして今の都会は虫と親しむ環境はなく、親も積極的にその方向に関心を向けさせないからだと思いました（私は都会育ちですが戦時には田舎にいました）。受験受験と口癖のようになってしまった結果ではないかと思いました。学校の教育では自然がいかに保たれ、循環し、人間も含めてどのように種の生長に関わっているのかなどは、文字からは学んでも実物で頭に入るほどは教えられていないのではとも思いました。

今、トンボは環境を計る指標の一つになっています。天覧山裏のトンボが豊かであることは、ここの環境がいかに素晴らしいかと云うことの現れでもあるのです。ここの開発が予定されていますが、私達は非常に大きな財産を失うことになると思います。飯能は東京都に近いため住宅事情など、時の要請はあると思います。でもそれだけに武蔵野の周辺地として昔の姿をとどめている天覧山裏から阿須丘陵地を、宮沢湖のような人工公園ではなく自然公園として県に買い上げてもらってその保全をするならば、単に埼玉県民のためのみならず関東一円の中に立派な財産を残したと後の人々に称えられると思うのです。今日映画ジュラシックパークを観ました。終わりのところで恐竜をつくりあげてしまった財産家が、もうあの島はそっとしておいてほしいと云いながら「自然はそっとしておけば生き延びる」と云いました。私は非常に心を動かされました。天覧山裏も乾燥が進んでトンボの数が減少してきています。でも一寸手をかして水分を保つようにすれば、昔の姿をまた取り戻してくれると信じています。天覧山裏と阿須丘陵地は、二つがつながって豊かな自然を作りだしているのです。ここを何とか残してほしいと考えている昨今です。

天覧山・多峯主山の四季

秋色の号



ベニマシコ Uragus sibiricus

朝夕の冷え込みとともに、天覧入りのヤナギも黄金色に染まり、一枚、また一枚と北風に葉を踊らせ、その横でヒメガマの穂が揺れながら小さな綿毛の固まりを逆光に煌めかせています。湿地に敷きつめられたミゾソバやヌマトラノオ、ヤノネグサやボントクタデは黄や赤に染まり、深まりゆく秋を感じさせます。

草はらでは、たくさんのススキが銀色の穂を風になびかせ、真っ赤な尾をした小さなトンボ・ヒメアカネが透明な羽に金色の太陽を反射させ、そっと茎にとまりました。赤黒く成熟した複眼とは対照的に、白い鼻先がとても印象に残ります。

ススキ原の中からは「チッ、チッ」とホオジロの声や「フィッ、フィッ」と口笛に似た声も聞こえてきます。声のする方向を探すと、イノコズチやノゲシの茎には冬鳥のベニマシコが数羽とまっています。ベニマシコは「紅猿子」と漢字で書くように、うすい紅色をした可愛らしい野鳥で、シベリアから越冬のため日本にやってきます。

ベニマシコはノゲシやイノコズチの種子を暫くついばむと、一斉に飛び立ち、谷津の奥へと消えていきました。

谷津を後にして雑木林の小道を歩けば、黄色に輝くアオハダや真っ赤なウリカエデ、黄金色のクリやコナラが澄んだ青空をバックに目に染み込んでくるようです。色彩は樹種によって異なり、また、同じ種類でも場所や成長の違いで多様な変化をみせ、彩りに深みをつけています。

林縁には、樹木に絡むタンキリマメが真っ赤に染まったさやを付け、その幾つかはすでに弾けて、縁から黒い種子をのぞかせています。初秋のころ、道端で香りが強く白い花を一面に咲かせていたセンニンソウも、その名の通り種子の先に白い絹毛の髭を付け始めました。雑木林の林床では黄色く色づいたチゴユリが紺色の丸い実をつけ、ツルリンドウは赤紫の実をつけています。

多峯主山の山頂に登ると、遠く冠雪を抱いた富士山が顔を覗かせ、頭上にはタカの仲間・ノスリが青空をバックに旋回しています。ノスリは翼を浅いV字型に広げ、輪を描きながら上昇し、風を受けては扇形に広げた尾を巧みに操り、空中でぴたりとホバリングを行いながら地上に動く小さなネズミなどの小動物を探しています。

ノスリをゆっくりと観察した後で山を下り、市街地にでる頃にはチヂミザサやササクサ、イノコズチ、キンミズヒキにヌスビトハギなど沢山の種子が服や足元に付いていました。

㈶日本生態系協会会員　市川和男

●ふる里散歩感想文

第一回自然学校『赤トンボ、木の実を観察しよう』に参加して

今回は、自然学校第一回ということで、少し勉強して予備知識を得てから山を歩こうということになり、まずは市民会館に集まりました。当日講師をして下さったのは日本トンボ学会会員の若菜一郎さんと（財）埼玉県生態系保護協会会員の高根広作さん。

高根さんからは、木の実や草の実についてのお話がありました。子孫を残すための、草や木のさまざまな工夫。たとえば、種子が熟すまでは、実を酸っぱくしたり渋くしたりして食べられてしまわないようにし、種子が出来上がると実を甘くして、鳥などに食べてもらい、種を遠くへ運ばせるなど。単純に捉えていた事の中にも深い自然の摂理が潜んでいるのですネ。

若菜さんからは、赤トンボを中心に、貴重なスライドを見せて頂きながら、珍しいトンボのお話しをたくさん伺いました。3億5千万年前1mもあるようなトンボがいたこと。トンボは種類によって産卵形態が様々で、空を飛びながら卵をバラまくような種類もいること。日本人はトンボにとても親しみを持っているけれど、ヨーロッパでは「悪魔の使い」とも思われていたこと。日本全国で21種類確認されている赤トンボのうちの10種類がこの天覧山付近で観察されていて、絶滅の心配のある種類も観察されていることなどなど。そして最後に、この地域の自然を残す必要性を力をこめて語られました。

秋晴れの空のもと天覧山からホタルの里、雨乞池とたどる道々、足を止めてはトンボ、木の実、秋の花々を観察ノートに書き込むのも忙しい程たくさんの名前を教えていただきました。植物や虫の名前を覚えたり、生態を知ったりすることそのものが大切なのではなく、知ることで、さまざまな命の存在と自分との距離が、とても近くなるのだなーと改めて感じることができた観察会でした。

当日観察された木の実、草の実は30種類あまりでした。トンボは、ヒメアカネ・ミヤマアカネ・アキアカネ・マユタテアカネ・ウスバキトンボ・オオアオイトトンボ・ルリボシヤンマ・ミルンヤンマが観察されました。

（鈴木弘子）

日よう日ふる里散歩のお知らせ

◎十一月九日(日)山の恵みを食べよう

◎十二月七日(日)落ち葉　中を歩こう

◎一月一日(木)天覧山・多峯主山　初歩き

◆集合時間　十一月と十二月は九時半
　一月は朝六時

◆集合場所　能仁寺山門前

◆参加費　十一月は三〇〇円
　十二月一月は保険料一〇〇円

◆持ち物　お弁当・山歩きの服装
　（一月はお弁当不要）

◆共催　埼玉県生態系保護協会飯能名栗支部
　はんのう景観トラスト